

観想と観見

安 田 理 深

「観」という字が二度使われてある。その、「観」という字で『願生偈』の正説分が、「観」という字の内容として述べられてある。それは、本願成就の、これは二十九種莊嚴功德といわれておりますが、これはつまり、一つの形です。実体的にそういうものがあるというんじゃない。我々は浄土というものを簡単に考えるんだけど、純粹な世界ということを一語で表わしているんです。内面に超えとる世界であります。外にそういう浄土を探してもどこにもない。それも一つの言い方であって、本来どこにもないけど、ないというよりも、人間が言うからどこにもないというのであって、人間によってないということは、ものとしてないという意味じゃないんです。かえって、ものとしては初めからある。こういう意味もある。

初めからある。世界の中に我々はおるんだけど、見えないのだ。見えないだけです。本来ある世界を自然の浄土というわけです。無為自然の浄土という。そういうような本来ある世界。見えないだけなんです。その見るまなこ、浄土を見る眼を、一心として開く。浄土を見るまなこが一心。浄土というのは一つの世界です。あるいは、世間。二種清浄世間と言われております。三種莊嚴という内容を持つておるんですけど、三種莊嚴というものは、やっぱりそこに我々の願いが、人間の願いが満足すると。人間の願いが満足するという意味は、人間の思い通りになると

いう意味ではなしに、人間の願いが撤回される。人間の願いが満足されるという意味は、かえって人間の願いが消えてしまうという意味がある。地獄に堕ちても後悔せんということが『歎異抄』にあります。そういうようなのは、喜んで地獄に堕ちていける。地獄に堕ちないような願いということが撤回される。普通の人が地獄に堕ちないように願って信仰を求めぬ。それは欲ですね。地獄に堕ちても後悔せんという、我が身なんか忘れてしまふ。こういう所に我が願いを捨ててしまふ。助けてほしいなんていう厚かましい願いを撤回します。如来のお心というものに目覚めてみれば、我が身が救われたいというような厚かましい願いは消えてしまふ。こういうような意味があると思う。それが実は、如来の願というものが、人間の願に込えている。つまり、本当の人間の願というものが、如来の願として応えられとる。それが願に生きるといふことだと思ふ。我々の願いが願い通りになるといふ意味ではない。もう不平も起こす余地がない。不平不満を起こす余地がないといふような世界を、三種莊嚴の世界と言ふのです。

その世界という意味を、『浄土論』、天親菩薩は二種の清浄世間と、「世間」ということで表わしております。世界といつても、世間という意味の世界だ。世間という意味は、どういう意味かと言ふと、世間といふのは生活という意味なんです。世界といつても、ただ感じている世界ではなしに、生活する世界。

浄土といふものは、浄土があるかないかといふような、そんなような思想の宗教、それは仏教の伝統にはない疑問なんです。神があるかないか、浄土があるかないかといふような、そういうような疑問といふのは、それはキリスト教でしょう。キリスト教はそういう疑問に答えようとして非常に苦労しておるんですけど、キリスト教の神学といふのはそういうものです。仏教では、いまだに仏があるかないか、浄土があるかないか、そういう疑問は出したことがない。ただ生まれるか、生まれないかといふことが仏教の問題になります。あるかないかといふ問題じゃない。生まれることが出来るか出来ないかといふことです。浄土といふ意味があるかないかといふことじゃない。生活を生み出すのです。生活です。新しい生活が見出される時、浄土に往く。

信仰というものはどういう意味かと言うと、新しい生活が見出される。古い世界の中であって、新しい世界が見出される。死んでから先という意味じゃない。現に生きている身において新しい生活が開けてくる。こういうのを浄土往生と言うわけです。死んでから先にどこかへ行くというような、そんな無駄な、当てにならない約束をしている意味じゃないんだ。この現生において新しい生活を開く。だからそういう意味では、古い言葉で浄土往生といっても、願生浄土といってもよく分からんから、今の言葉に直す。今の言葉といっても、古い言葉をなにしたのではないんだね。全然古い言葉を捨てて、新しい言葉を創ると。これまでであった考えをやめて、私の考えを述べるということになると、そんなものでは教学になりはしません。仏法を棄てて安田の考えを述べるということじゃ仏教学にはなりはしません。安田ばっかりじゃない。安田であるのが、曾我であるのが、人間の考えというのは教学になるものじゃない。そうじゃない。古い所に新しい意味を見出す。如来の中に人間というもの新しい意味を、これまでの人間観ではない人間観というのがそこに見出されてくる。こういう意味です。あるかないかという話は、仏法の外の話だ。ものがあるかないかというよりも、どう見るのかということですね。あるかないかじゃない。あるものをどう見るのかという問題です。

だから、僕は浄土往生という言葉は、古い言葉に即して言えば、「観彼世界」。逆にすれば世界観。観世界を逆にすれば世界観。世界観を持つということですね。それが浄土往生という意味なんです。世界観を開くという意味です。何の世界観かと言うと、唯物論的世界観でもないし、観念的世界観でもないし、一心の世界だ。信心の世界観。そういうものをここで明らかにする。

信心を得るといっても、普通の人は分からんのと違うかもしれないけど、普通は得るといえるのは物を得ると思うんです。財産を得るとか、金を得る。そうじゃない、ものを得るといえることは仏教にはないんです。ものは得るとか得んとかいうものではない。我々が得るのは、金を得るといえることにはないんであって、金に対する煩惱を得るといえること

がある。金は天下の回りものと言うて、人の懐にあるか、私の懐に移ってくるかの話なんです。人の懐から私の懐に場所が変わっただけだ。そんなものに得るも得んもない。ただその、我々が言えるのは何かと言うと、煩惱です。金じゃない。金に対する煩惱を得る。これはなかなか忘れられない。金は落とすということはあるけど、煩惱を落としただけじゃない。金を落とすという心は永遠不滅だ。ついてまわっておる。だから得るということは、品物について得るとするのには、金が惜しいという心は永遠不滅だ。ついてまわっておる。だから得るということは、品物について得るということはないんだ。

信心獲得という。やっぱり何かそこに、煩惱があるとかないとか言うけど、煩惱ということは自覚でしょう。曠劫已来の時間を計算してみた人はまだおりません。しかし人は曠劫已来迷っておる。たとえ一時間の迷いでも、その迷いの性質は曠劫已来だ。曠劫已来の意味を持っている。つまり、曠劫已来というのは、誰かは迷うけど、誰かは迷わないというものではない。おおよそ人間である限りの迷いなんです。

人間の迷いを自分に迷う。だから自分が眼を開く時に、また人間も眼を開く。それが仏教の考えですね。釈尊が成道された時に、山河大地、山川草木が同時に成道した。釈尊が悟りを開かれた時に世界が同時に悟りを開いた。悟りというようなことは、自分が今言ったように個人的経験、心的経験というようなものじゃない。信心みたいなこともそうです。だから我々が、信心と言うのも、一つの自覚というものが生まれてくるということだ。それは何か、ものを貰ったという意味じゃなくて、ものに関係のない自覚が開かれたという意味です。そうするとそこに、世界が見直されてくるんです。全く、本当に夢にも見えないということを言うが、浄土こそ夢にも見えないことです。金子先生は夢ということが非常に好きで、「夢の如くほのかに見えたもう」というようなことを表現されるんです。それは金子先生のことだから、私の口を挟むことじゃないんですけれど、それも一つの金子先生のご意見であって、私がどうこう言う権利はありませんけれども、浄土というのは夢のような世界ではなしに、夢が覚めた世界。やっぱり夢見るの

は人間の心です。浄土というのは夢見ることが出来ない。夢にも見ることが出来ない。つまり、仏にならなければ分
からん世界だ。凡夫のまま浄土を見るなんてことは、夢に見たことだ。浄土そのものは仏にならなければ、浄土を
見ることが出来ない。だから、仏の悟りをいただくということだけれど、凡夫には仏の悟りを、悟りのままでいた
けないんです。さつき言ったように、凡夫にあつて、仏の悟りを開くという場合は、信心という形になる。信心とし
て、仏の智慧をいただく。身は凡夫であつても、仏の世界を見る。仏の心というものを一つの信心としてたまわる。
仏の知見を開く。だから信心の智慧と言つてあるでしょう。

信心は智慧なんだ。感情でもなんでもない。我々の有り難いとかそんな想いじゃない。智慧なんだ。自覚の智慧な
んだ。その自覚の智慧というものを開くならば、それが初めて有碍の世界に無碍に生きていけるんです。つまり二と
二を加えれば四になるといふようなソロバンを超えて生きていける。越すに越されぬ大井川というのではない。渡れ
るようになって渡るのではない。渡れぬままに渡る。渡れるようになって渡るんじゃない。渡れんままに渡る、それ
が無碍だ。無碍の、そういう一つの生活だ。そういう生活が開けてくる。浄土は何かものじゃないのであつて、生活
です。新しい生活が生まれてくる。その生活が生まれてくるような信心を開く。信心の世界観だ。新しい世界観とい
うものがそこに生まれてくる。これはつまり言つてみれば、古い古典の中に新しい意味を見出してくる。古いものを
棄てて、私が我流に新しい解釈を加えるというんじゃない。古い言葉の中に、非常に新しい意味というものが見出さ
れてくる。

「観世界」を「世界観」と逆にすればいい。「観」というのは何かと云うと、一心が見えるのだ。「観」の主体は何
か。観ずる、観ずると言うけど、観ぜられるものは浄土であるけれども、観ずるものは何かと。これが、一心が観ず
るんです。願から生まれた一心が、願を観ずる。願から生まれた一心であるが故に、願を観ずることが出来る。願か
ら生まれてこないような一心なら、願の世界を観ずることは出来ない。内観は出来ない、外観しているだけだ。尊を

しているだけだ。浄土の噂をね。浄土の噂という話だ。話じゃ腹はふくれぬ。噂話しとつてもです。信仰というのはそういうもので、分かったというんじゃない。それを生きるのを信仰という。本願を信じたということは、その本願に生きるということだ。生きるといのが生活だ。本願と言ったら生活の原理だ。それを生きずに、本願の話しとるといのは噂話だ。坊主の話というものが本当に生きてこないのはそういう意味なんだ。なんぼ有り難い話でも噂じゃ腹はふくれぬ。本当のものが言えない。噂で満足しとる。それでも腹は減ってくるから、時々注射する。信仰に足が生えないのです。あっち行って話を聞いたり、こっち行って話を聞いたり、そういう偉い人の話を聞くから偉いようだけれども、その人の後を追っかけているとだけじゃないか。そうじゃない、曾我先生や金子先生を背負って立つような足が生えなきゃならん。曾我先生の口真似をしとるだけでは信じたという意味はなからう。口真似をしとるといことは、本当のことを言ったら口真似も出来ん。間違えて口真似をしとるだけのことだね。

そういうような意味で、ここから「観」という字が出てきた。これは内観というような意味です。外観じゃない。本願の外から本願を観察しとるんじゃない。その時に「観」という字は、『観無量寿経』にも「観」という字が使われておるし、『浄土論』にも「観」という字が使われています。同じじゃないかと思えるのですけれど、曇鸞大師なんかはそんなように考えたのです。『観無量寿経』の「観」も、『浄土論』の「観」も同じである。だから、『浄土論』というものは三経一論である。こう考えとるけど、言ってみれば、親鸞の立場から見れば、曇鸞大師のそういう解釈はまだずさんなんです。区別が分からないのです。『観無量寿経』の「観」も、『浄土論』の「観」も一つと考えているのですから、教学がずさんです。だから「観」と言っても、『観無量寿経』の「観」は「観想」というものです。次に何々を想せよという「観想」です。『浄土論』の方は「観見」です。「願見弥陀仏」と書いてあるでしょう。「願見弥陀仏」。「願生偈」は「我作論說偈」と結んである。「我論を作り、偈を説きて、願わくは弥陀仏を見たてまつり、

普く諸の衆生と共に安楽国に往生せん。」と、願見・願生です。願という字が付いているけど、阿弥陀仏を見る。それで、阿弥陀仏の国に生まれたいと願する。願生・願見。安楽浄土に生まれたいと願うのは、阿弥陀仏を見んがためである。仏を見る。仏を見るということは仏になる。あらゆる衆生が平等に、仏を見ることが出来る。つまり、安楽浄土に往生すれば、その往生を通して成仏することが出来る。我々衆生が皆阿弥陀仏になる。こういうことが出来るんだ。

普通の考えで言うと、阿弥陀さんというものが一人いると考えるが、そうじゃない。あらゆる衆生が阿弥陀仏になる。あらゆる衆生が法蔵菩薩として生まれた。法蔵菩薩が一人ということはない。法蔵菩薩が本願を起こして、本願成就して、法蔵菩薩が阿弥陀仏になられたという物語は、物語でしょう。ところが、誰の物語かと言うたら、我々衆生の物語なんだ。我々衆生を明らかにする物語。我々衆生をとってしまえば、それは噂になるでしょう。おとぎ話じゃないか。そこに「願見阿弥陀仏」ということがある。「願見阿弥陀仏」。「見る」ということがある。

「観」というのを見るということとはちょっと違うんだ。つまり「観」というと、現前という、現れるという意味がある。「観」というと、現れる。仏が見えるということだ。一心に仏が現れるということだ。こういう意味だ。結局これは、「観」も「見」も、「現」です。だから現見という。現見という言葉が一つにはあるんです。現見するということですよ。だからして、仏というものを見ると言うんじゃない。仏の眼をいただく。得るということです。仏の眼をいただく、あらゆるものが仏として見える。仏様というものが特にあるわけじゃない。仏の眼を開くということ、あらゆるものが仏として拝まれる。こういう意味なんです。そういうのが本当に見るということです。それが信心の智慧なんだ。信心は智慧なんだ。感情とか、体験とか、そんなことを言っているんじゃない。智慧なんだ。「観経」では、そういう字で使われず、「想」という字を使っている。観想すると言う。何か観ということの、本当の観、観見というものがよう分からん。だからして、観を通して、見を表わしている。それがつまり第七華座観という。第

七華座観というのが、『観無量寿經』の眼目なんです。第七華座観にくると、初めてそこに、第七華座観までも、第七華座観から後も、皆「想」という字で一貫しているんだけど、華座観の所だけに「見」という字が出てくる。想を通して見が開けてくる。この見を無生法忍という。つまり、悟りです。信心に悟りの智慧が開けてくる。智慧といっても、仏教の智慧という意味は算術の知恵とか、そんなような知恵じゃないんです。論理的に二を引くという意味じゃないんです。仏教の智慧というのは、承認という意味。そうであつたかと承認することだ。世間の知恵はそうではないんだ。概念を構成することです。判断を確立することです。判断によって概念を作ることが世間の学問でいう認識というやつだ。そういう意味じゃないんですね。承認することだ。何かものを作ることじゃない。あるものを作ることじゃない。そうであつたかと、あるものを承認するんだ。

そういう意味で、「観彼世界相」の「観」という意味は、諦観するという、これは諦かに観るという意味だね。観るといふんですけれど、実際に見えるんですね。つまり諦かに観るといふのは、これはつまり諦らめるといふことです。見えるんだ。諦かに観るんですから。そういう意味なんです。諦めたと言つと、世間の言葉になつてゐる。もうやめてしまふということを諦めたと言いますね。つまり、我々の分別というやうなものをやめてしまふのである。人間の分別にサヨナラということが言えるんです。それは本願にふれたからや。ふれずにサヨナラを言うから絶望になつてしまふ。世間で諦めるというのは、絶望したという事でしょう。絶望したけど、人間は絶望出来ないのです。人間が絶望出来ればいいんですけど、「ええくそいいまじい」と言つて、そういいまじいとやうだけで絶望せんのですよ。出来んです。仏の智慧というものに触れてですね、仏の智慧をたまわつて大地に還る。その時に初めて、喜んで自分の考えに絶望することが出来る。曠劫已来、自分の考えを自分にしておつたんだ。そういうものにサヨナラを告げることが出来る。つまり、自分としておつたというのは、それを自分だと思つておつた。そうじゃないんであつて、自分を迷わしておつたものだとやうことが分かつてくる。自分の考えが自分を救つてくれたんじゃない。自分

を迷わしておった。その思いから離れる。それがつまり、観念論を超越するということだ。観念を破る所に生活が生まれる。これまでは自分の思いを自分だと思っておった。それだから、思いに絶えず一喜一憂して来ている。調子がよければ喜び、調子が悪ければ絶望する。そういう若存若亡の信仰に生きておつたんだ。そういう思いに絶望する。そういうような、生活が始まるという意味ですかね。これが大事な所です。

信心というのは、信心生活なんです。生活を開くような認識だ。ものが分かったというような意味の知恵じゃない。悟った智慧、悟りの智慧です。分別を棄てる智慧じゃない。分別の消えた智慧だ。つまり、裸になった智慧です。分別の着物を脱ぎ捨てて、裸になった智慧です。そういう事です。それが初めて、大地の人間になったんだ。そういうものでないと、仏教は意味をなさないと思う。ただ生真面目に寺に参つて、そして、主観満足の生活。だから、そういう事を考えると、阿片だというような非難も出てくる。阿片だというのは、信仰というのは酔うているんじゃないかということですよ。智慧という意味にすると、信仰というのは酔う智慧だという。恍惚の信仰じゃない、自覚の信仰というのはそこからです。自覚というのは悟りです。悟りの智慧というのだ。凡夫に仏の悟りをたまわるんです。仏の悟りを、悟りという形では凡夫はいただくことが出来ない。信心として仏の悟りをたまわる。それを、『観無量寿経』では無生法忍という。だからして、『観無量寿経』では、「想」というのは、これは方便です。

『観無量寿経』は方便の教えだ。その方便を通して眞実を表わしておる。その眞実がどこに表われとるかというのには華座観に表われている。つまり韋提希夫人が、ここで信心を決定したんだ。空中住立の仏を見た。「立つ」という字が使つてあるでしょう。空中に立つた仏を拜んだ。立つという意味じゃない。立つというのとは、たすけんとおぼしめたちける如来にふれたんだ。たすけんとおぼしめたちけるとは、空中住立の仏というのとはつまり欲生心の象徴なんだ。それだから、韋提希夫人の方も念仏もうさんとおもいたつことが出来たんだ。「たつ」という具合に。つまり信心というものはある。ただ見ておるのは観想や、観念なんです。立ち上がる所に生活というものがある。た

だ考えとつても生活にはならない。ただ信仰を味わっているというだけだ。味わえる信仰です。そんなものは隠居の信仰だと思う。信心が、隠居の信心なんです。こういうことであろうと思うんです。

ところで、今言ったように三種莊嚴の世界というようなものを、すごい満足の世界をよく見ると、願生というふうに使ってあるみたいですけど、願という字、願見弥陀仏というふうに使ってあるんだけれども、その願というものは、分かれて見ると、三種莊嚴に即して三種の願が明らかにされている。三つの願がバラバラになるというわけじゃないでしょうけれども、願というものに人間の願いとか、要求とかいうものを、完全に言い表わすというのと、やっぱり三種の願になるわけです。そこに一番最後から言うと、菩薩の願がある。「我願皆往生」といつて菩薩が往生する。菩薩の願生や。菩薩の所にも願が出ている。これは、菩薩の衆生を教化するというような願です。衆生を教化する、衆生を助けたいと。それで、その仏の本願というものは、これはやっぱり衆生を助けたいという意味もあるんだけれども、また自分も成仏したいということもある。自利利他円満というのが仏の願でしょう。ただ衆生を助けたいというだけじゃない。衆生を助けることによって、自分も仏になる。衆生を助ける。衆生が皆仏になるような、そういう仏に自分もなりたい。それが阿弥陀仏である。一人のという意味ではなしに、あらゆる衆生が皆阿弥陀仏であるという、阿弥陀仏になりたい。こういう意味だね。こういうものが出てくると、どうもいかんですわね。衆生を助けたいだけの願ではその願が満足せんのかなかと思う。衆生を助けたいという願だけで助けられるというんじゃないか。助からんのかなか。いつまでも何か、如来に恩を着ていなければならん。お情けで助かるということになるんじゃないか。どうもそれじゃあ我々というのは満足出来ない。そうじゃない。仏が仏になりたい。それが根底にある。法蔵菩薩が四十八願を起こして、それから重誓の願でもう一遍その本願を繰り返して、その要点を述べてある。重誓の偈という偈文があります。或いは三誓の偈とも言われています。四十八願を、三種、三誓に、三つの願に要約して述べてある。その三つの願というものが一番初めはあるけれども、四十八願全体を満足したいという

願です、総願です。それはどういうことかと言うと、この四十八願によって仏になりたい。他の願によって仏となりたいのではない。この四十八願を満足することによって仏になりたい。ただ漠然と仏になりたいという意味じゃない。この四十八願によって成就されるような仏になりたい。だからして、「我建超誓願 必至無上道」、必ず無上道に至らんと。「我建超誓願」、この超世の願によって無上道に至る。無上仏道を成就したいと初めに願ったんだ。四十八願で成仏していく。

ところがもう一つ、異訳の聖典です。『無量寿如来会』という聖典で見ると「必至無上道」という言葉が、「無上菩提の因を証すべし」という言葉になってます。「無上菩提の因を証すべし」と。「無上菩提を証すべし」と。無上菩提を証すべし」というふうになっていない。正依の経言では、「無上菩提を証すべし」となっておる。「必至無上道」と。無上菩提に至らんと、無上菩提を証しようと、こういうふうになっていますけれど、異訳の『無量寿経』を見てみると、梵本にそういう違いがあったのかも知れないけれど、「無上菩提を証すべし」と言わずに、「無上菩提の因を証すべし」と、こういうふうになっている。非常に目立っている。それを、親鸞は非常に深く注意している。そういうことを注意してみると、そこばかりじゃないんだ。『如来会』の経言をみると、そこばかりじゃない。十一願の所にも無上菩提の因を建立するということが出ている。だから、そうしてみると無上菩提は仏の悟りですけど、無上菩提の因といたら、これは信心のことでしょう。無上菩提は仏ですけれども、無上菩提の因といたら、仏になる因。無上菩提の因。無上菩提の因は無上菩提心です。そうしてみると、この四十八願というものは法蔵菩薩の信心だ。法蔵菩薩が、自分の信心を徹底している。こういう意味だ。こういうことになるとるんだ。ここらをよく考えてみてください。我々は、法蔵菩薩が本願を起こして、その本願のおかげで我々が信心を起こすと考えておる。そうではない。そうなるというと、神話という話が活きてこんじゃないかね。話で本心に信心をいただくということになる。そんなことが出来るだろうか。本願の噂くらいで信心を得るだろうか。そうなるでしょう。だから、こういう所をよく考えてみてくださいね。

これは法蔵菩薩が信心決定されたことを述べてある。だからして、仏の物語ではなくて、我々の物語。法蔵菩薩は阿彌陀仏の譬えではない。我々の象徴なんだ。そういう視点が非常に大事なんです。もっと言えば、噂話でないという意味は、どういうことかと言うと、その法蔵菩薩とか阿彌陀仏という言い方は、何か自分と無関係に言えば、法蔵菩薩というのも話、阿彌陀仏というのも話です。初めは法蔵菩薩、終りは阿彌陀仏と終わってくる。それは噂話と変わらないんです。娑婆に生きて、現実悩んでいる人間に無関係な話だったら噂話です。そういうものではない。つまりそれはどういふことかと言うと、本当のことを言ったら、仏法なんでしょう。法蔵菩薩の噂話をしているんじゃない。仏法を表わしておる。仏法というのは仏の法という意味もあるけれども、仏にする法です。仏たらしめる法です。その仏法というものは何であるかと言うと、『大無量壽經』の本願というものに依ってみると、それは「南無阿彌陀仏」である。「南無阿彌陀仏」。「南無阿彌陀仏」が仏法ですね。だから「南無阿彌陀仏」のことなんです。「南無阿彌陀仏」の意味を表す一つの物語だ。こういうふうに考えたら、これは誰も文句の言いがたない。「南無阿彌陀仏」の物語。だから法蔵菩薩というのは因位の「南無阿彌陀仏」。阿彌陀仏というのは果上の「南無阿彌陀仏」。だから「南無阿彌陀仏」の本願を起こして、「南無阿彌陀仏」と成られた。こういうことだ。「南無阿彌陀仏」というものを持つと、「南無阿彌陀仏」というのは仏法の信心ですから、人間を廻転し、人間の眼を開いて、人間を本来の、人間に還すような真理。それが「南無阿彌陀仏」。仏法です。

私が言うのは少し面倒かも知れないけれど、私は、どうもキリスト教とか、他の宗教と仏教との区別をどうしたらいいかということの色々考えてみるんですけど、昔から考えているんですが、それが上手く自分が領く所までなかなか明らかにならないのですけれど、そこに、何でこんなことにこだわるように思うかと言うと、それは法ということに注意しなければいけません。法だ。法ということを我々皆使つとるけど、よう分かって使つとらんです。それは無理もない話であって、仏教では法ということが無限に、色々に使われるんです。万法唯識というようなことを言うで

しょう。森羅万象、あらゆるものを法と言う。そういうような使い方をすると、あまり広すぎて分らないということになる。そういう所から注意すると、曾我先生がよく「おみのり」ということを言われるでしょう。「おみのり」。若い時に言っておられたか、ちょっと記憶にないですけど、晩年になって、非常に円熟されてからでしょうかね。

火というものがあります。火というものの法性は、火というものの本質は何であるか。火の法はなんだという。火はものを焼くという。焼くということが後からではないんだ。自分が焼くという性質を持っている。火が焼くという働きを輸入してきたのではない。本来、火自身として焼くという働きを持っている。それが火の法だというふうな言い方です。法というのはこういう意味を表わすわけです。このように簡単な意味なんです。面倒な意味じゃない。だからしてあらゆるものを、あらゆるものにさせているのも法だけど、今我々が大事なのは、救いとか、そんなことを言う間に、今あらゆる衆生を仏にするという法が欲しいんだ。それを「おみのり」という。

そうしてみると、南無阿弥陀仏以外のことは、定散二善というようなのは、我々が法にしたんだ。認知じゃない。我々が加えたんだ。南無阿弥陀仏だけは本願によって、我々がするんじゃない。本願によってそうされる。本願によって自然に法とされた。南無阿弥陀仏以外というものは何かというと、いろいろ数があっても努力だ。仏になる努力だ。南無阿弥陀仏以外に法を見出そうとすれば、努力しかない。外から加えるんだから努力は法じゃない。だからして、念仏を、我々が仏になるようにしたんじゃない。我々ではない。本来の仏法なんだ。それだから、「聖意惻り難し」という。我々がはかるうて、そうしたんじゃない。初めからそうだけども、初めからそうであるというだけで、そうされておるといふ御はからい、はからいに「御」と言う字が付く。仏の法が働く。この意義が南無阿弥陀仏ですね。だからそういう法に目覚めた所に仏にされた。仏にする法によって仏にされた。されたのを信心という。努力じゃ信心が成り立たない。南無阿弥陀仏によって初めて、信心が成り立つてくる。自分の作った信心ではない。南無阿弥陀仏によって初めて信心が成り立つてくる。南無阿弥陀仏を離れると信心が成り立ちようがない。「信じとる」とい

うのは、ただ頑張っておるだけだ。頑張っておることは得たがっておることだ。みんな力は入れておるんだけどもいい加減だ。こういうようなものです。

仏様の本願を押さえた仕事というのは、我々がそれによって助かるという。これは宗教の大事業でしょう。超世の大事業です。ほとけが仏になる。一切衆生が仏になるといふのは大事業です。大事業という意味は世間に入らんという意味だ。だから世間の眼で見るといふと、仏法の眼といふのは目に見えんです。大事業だから。あまり大きいから目に見えん。世間から見ると何かけちくさいことのように見えると、世間の眼で仏法といふものを見ると、何もしとらんじゃないかといふふうに見える。そういうふうに見える方が見えるのであって、別に見るほうが見えないだけの話だ。そういう所もまた、見えるように努力して世間に媚びる必要はない。世間に見えるようにしようということになると、それは宗教プロカーの仕事になる。だから何か会を開いたり、運動を起こしたり、わしも負けんということを書いてみたり、バスに乗り遅れんと言ってみたり、いろいろ苦勞するわけです。それは商売ではないかね。何もせずによららん。人間は何もせずによらんな腹はできないのだ。何かすまんような気が起きる。そんなもんだ。昔、禅宗の臨済という人がおったんです。ここから臨済宗が始まったんです。無為の真人という。無為、何もせんという。それを真の人という。何かするのが人間じゃない。何もせずにおるのが人間という。こういうようなことを言ったんですね。だから僕は法といふものは、そういう大偉業は、仏様の本願を抱えたというそういう大偉業は、法といふものを明らかにしてくだされたという所に、そういう意味がある。阿弥陀仏が本願を抱えたとか、釈尊が世に出興されたという意義は何があるかというところ、法を興こされた。これが大きなことです。南無阿弥陀仏という法を、本来の法を明らかにしてくださった。こういう意味だ。だからその法を明らかにしてくだされたときに、仏の仕事は済んだんです。だから仏は直接に自分の手で衆生を救ってやるなんてことはされないのだ。法を与えられた。仏とすることのできる法を与えてくださった。そこで仏の役割は済んでいる。むしろ法がないなら、今日はこの人を救った。

明日は彼を救うということになる。なんぼ仏様でも忙しくてかなわん。そうでしょう。一人の人間というものが救われるには暇がかかるんです。死ぬるまでぐらい包んでくれるといいんだ。死んでも救われななのだ。また生まれ変わってきてということがある。息が長いのです。皆、最後までにはどうかしてやる。計画が大きいのです。全世界の衆生が皆仏になるまでという計画を立てた。気が長いんです。今月中とか、目の黒いうちとか、生きとる間とか、そんなこと言っているんじゃない。救われないうちがあるわけです。暇がかかる。だから、法というものを出すと、手間がかからないでしょう。皆がいつでもどこでもそれによって救われる道が開く。法があればね。仏様が直接救うというと、救われる人だけが救われるだけだ。法というものが与えてあると、あらゆる人が、いつでもどこでもそれによって救いにあずかる道が開けてくる。ここが大事なのだ。

僕はこの法というものがはつきりせんから、神様というものを立てるんだと思う。そういうものだと思う。法がはつきりわからんものだから、いろんな助けてもらうものを立てる。最後には天皇というような神様を作ってしまう。人造宗教が起こる。だから仏法の特徴というのは、何も立てないというのに仏教の特徴があるのです。助けてもらうものを立てないという。そういう意味においては仏教は初めから他力じゃないんです。他から助けてもらおうというんじゃない。法に依る。他力ということも誤解すると、依頼することになる。つまり法が見つかったら依頼せんていいという。何も依頼せんような信仰を確立する。それが法なんだ。仏教には神様みたいなものを立てないのは、法があるからですね。逆にいえば、あらゆる仏教以外の宗教が神様を立てるのは、法が分からんからだ。だからして法を明らかにされたという所に、仏様が、仕事を終わって仏になった。阿弥陀仏というのは仕事が終わったという意味だろうと思うんです。そして、仕事が終わって隠居している阿弥陀様に、もっと助けてくれと言う、ひとはたらきしてくれと言うのは無理じゃないかね。それだから真宗では仏像を祀らん。多少妥協して仏様を祠つてあるんですけれど、本当いったら南無阿弥陀仏が仏様だ。仏様の名が本当に仏様なんです。仏の名が法身なんです。

自由自在に娑婆というものを、娑婆の中にどんな所でもはたらいっているような仏様。そうでしょう、いつでも南無阿弥陀仏が出るのだ。準備して出るといふことはない。準備はいらないのです。善人悪人区別なしに、念仏というものに触れる。

仏様にとつても法です。我ら衆生にとつても、仏様に救われるといふことは法に救われるんだ。南無阿弥陀仏の真理に救われる。救われるといふことは真理に適うことだ。我々の欲望に適うといふことじゃない。欲望なんか起こしておるのは真理がわからんからだ。欲望にこたえたら迷信になる。そうでしょう。人間の欲望にこたえたら現世利益だ。何か人間の欲望にこたえることが信仰だと思ふけれど、そうじゃない。本当に苦しければ、本当に悩みが深ければそこが自覚の縁になるけれど、いい加減な救いといふものを与えるといふと、助かったような気分になるといふと、本当の宗教に目覚める縁を失わせてしまう。それは恐ろしいことです。かえって本当に真剣に悩むというほうが、信仰の縁に近いのです。悩まんようになって、それは危ないことだ。悩みが本当になるといふのが、煩惱の悩みではなしに、本当の純粹な悩みになると、その悩みがそのまま本当の救いじゃないかと思ひます。

苦悩というものがありません。これは、外部からの苦しみといふことですね。mitleidenといふと、共に、苦しみを共にするといふ。これは、損取不捨、「損して自体となして、安危を共同する」。安危といふのは運命だ。一切衆生を損取して、一切衆生と運命を共にする。こういうことが、共同安危。これがつまり mitleiden。mitleidenといふことを象徴してあるのが法蔵菩薩。あるいはキリストなんだ。人類の歴史において、皆が知っている形であるのがキリストの十字架といふものです。キリストの受難、難を受ける。leidenといふのは受けるといふことなんです。苦しみを受ける。罪なくして苦しみを受ける。罪で苦しんだる人類を罪のない神が自分自身としてそれを受ける。そういう意義がある。キリストの十字架として象徴されておる。

その Leiden-schaft といふことを大事にしておるのは、キリストと法蔵菩薩の二つしかないと思ふ。えらく大きな

話をしようですけれども、仏教といってもそうじゃない。仏教の中の法蔵菩薩の本願、それは真宗の信仰である。こういうものじゃないと思う。これは人類の歴史における双壁じゃないかと思う。法蔵菩薩という如来の因が、そういう具合にいつとる。キリストというのは特定の場所の、ナザレという所に生まれた人間です。ナザレに生まれたイエスという名前人間をキリストにするんですね。こちらではそういうことはないんです。つまりキリストと釈迦と云うけれど、釈迦じゃないんです。法蔵菩薩でないためです。普通はキリストという釈迦となるけど、そうじゃない。釈迦はキリストと言えんのかな。特定の人という意味では釈迦と同じだ。特定の人だというと、キリストというのは唯一のものになってしまう。ナザレのイエスという特定の所における特殊な人間になってしまう。つまり救い主がね。そうじゃない。仏教の法蔵菩薩という誰でも法蔵菩薩、誰でもキリストなんだ。それを法というんだ。ある人だけじゃないのは法じゃない。キリストを法にするんだ。キリストというものが法という意味を持ってきたものが南無阿彌陀仏だ。だから法蔵菩薩という人がおったという意味じゃない。因位の名前だ。法蔵菩薩というのは因位の南無阿彌陀仏のことなんだ。それだから親鸞聖人の解釈によると、一如法界という。別にそういう人がおったというわけではないのだ。眞実功德と『浄土論』に出てくる。眞実功德というのは浄土という意味もあるし、また名号という意味もある。親鸞は眞実功德を名号としてとってある。その眞実功德の名号から現われて法蔵と名告った。それで本願を建てた。そして本願成就して阿彌陀仏と名られた。親鸞はそういう説明をしていますね。

方便法身という解釈の所へ出とるんですけれど、僕はそのに、名号から法蔵菩薩が現れ、そして本願を起こされ、そして阿彌陀仏になった。だから言ってみれば、南無阿彌陀仏の物語なんです。特にそういう人がおったという意味じゃない。南無阿彌陀仏の物語なんです。南無阿彌陀仏が、南無阿彌陀仏になった物語。阿彌陀仏を法としてみれば、何もそこに自分以外の力で自分が救われるという意味ではない。法蔵菩薩の本願は南無阿彌陀仏の意味ですから、仏法という意味、法に適用するという意味です。本願というものは、法に備わっている意味を表わすんです。その体は名号

である。名号に備わっている意味として四十八願というものが備わっており、それを物語りという形で表わしておる。だからして名号を以て浄土を回向した。名号によって、いつでもどこでも誰でも浄土にあれるような法というものを建てる。その南無阿弥陀仏の法によって、浄土を見るような眼を開くことができる。浄土という世界観を開かせる。それで「観」という字が出てくる。「観」というのは観想じゃない。観見なんです。

学生でない人は興味ないかも知れないが、日本に西田哲学というのがある、田辺元という人が曾我先生の本を読んで、『懺悔道の哲学』という本を書いた。有名な先生ですけど、もう亡くなりました。曾我先生によって、晩年になってから親鸞に触れたんだ。そういう人でですけど、それが「観」ということを、これは面倒な話ですけど、西田さんが功利的直感とよく言われました。それを田辺さんが批判してですね、西田哲学は観想の哲学だと言って非難しておられた。僕はそれは田辺さんの考え方は浅いんじゃないかと思う。観といたら観想だと思う。観見という観があるのを知らないのです。一心の内観と言ったらこれは唯識観なんです。やっぱり天親菩薩は唯識の論家ですから、唯識観という形で阿弥陀仏の信仰を明らかにし、『大無量寿経』の精神を明らかにしたのが『浄土論』です。ここに、唯識観について、方便唯識と正観唯識、正しく観とすることがある。だから「観」といつても方便の観と、正観、真性の観ということが区別されておる。観の位、観の段階がある。方便観を通して真観を磨く。田辺さんは方便観だけが「観」と思っておるんじゃないか。だから、この「観彼世界相」というのは、妙観察智という意味じゃないでしょうか。観察と書いてるでしょう。五念門の中に作願・観察とある。観察と言いましても妙観察智ですかね。妙観察智というのは唯識論の言葉です。第六識です。第六識を、妙観察智を得ると言う。細かいことは別にして、言葉だけのことです。『浄土論』の観は、「観」と言っても妙観察智という意味での「観」なんです。南無阿弥陀仏を通してあらゆる衆生に、どんな衆生にも、どんな場合でも、一つの世界観という、浄土の世界観という眼を開かせる。こういう具合に往生浄土ということの意味はそういうことを表しておる。

「観」が二重になっておる。初めは何か世界を観じる。それから如来の本願を観じる。つまり、二重になっておる。さつき言ったように器世間と、衆生世間とです。衆生世間は仏も衆生、菩薩も衆生、菩薩というようになることは本願から言うると二十二願です。菩薩莊嚴というのは本願の上から言うると二十二願だ。人間に衆生を教化するという願いがあるんです。どうも人間は自分だけが救われたらいい。しかし一番愛しいものは自分の身に近い家内とか子供だ。こういう思いがあるわけです。人のことよりも自分の身近なものに信心をいただいてほしいと。切なる親の心です。だけどなかなかそういかんわけです。息子ほど言うことを聞かないんです。だけど聞かないけれど、それが切々な衆生の要求じゃないでしょうか。そういうことがある。だけどそのままです許すということとはできない。そうなる人間は布教家になってしまふ。布教家として息子を育てるということになる。

そうじゃないと思うんです。阿弥陀仏の本願に帰すれば、人を教化しようなんて願いが、阿弥陀仏の本願の中に満たされる。こういうことですね。もつとと言うと、本願に帰すれば、自分が自分でわざわざ教化するなんてことはいらないのだ。自分でやった教化なんてしたもんだ。特定の人の特定の範囲のことではない。本願に乗れば、自分がそこに浄土の菩薩の徳をたまわるんだ。そこに人を救いたいというような意味も満たされる。だから浄土の教化は急ぎ念仏することだ。直接に人を教化するのではなく、急ぎ念仏して我々お互いが仏となることである。仏となるというと、そこに同時に十方に身を現じてはたらくというような徳をたまわるのだ。そういう自分の布教の要求が満足される。自分が個人で布教しようというようなことではなしに、そういうようなのはただの理想主義だ。聖道の慈悲というものだ。そういうのではなしに、そういう思いが深ければ深いほど、我々が阿弥陀仏の本願に帰する。本願に生きるという。本願ということの中に我々の、布教したいというような要求をするのじゃないですよ。布教したいという要求がそこに満たされる。こういうことになるのじゃないかと思えます。伝道の要求、願いというものが満たされる。伝道というのはお節介だ。そういうことにならないのだ。そういうことはどうでもいいというのは二乗

だ。かえってエゴイズムになってしまふ。人を救うという願いはあるけれどもできない。やってみてもある程度まではできるけどもすえとおらない。そこに安田という個人、身分があつたらできない。本願に帰すれば、今度はその十方世界に身を現じる。

自分にとっては往相の一つで、自分が本願に乗じるということは往相だ。往相と還相と二つやるということじゃない。我々が往相というのに乗ずれば、自分以外は全部還相になる。人が還相するというんじゃない。人のはたらきが全部還相になる。

自分が善をなすということはなかなかできないことだけど、そうではない。人の善根を喜ぶ。随喜する。喜捨と言うでしょう。喜んで捨てるという。つまり随喜するという意味です。自分が善をなすんじゃない。人の善に随喜するという。それは自分が善をなしたより何百万も大きいんだ。自分がこつこつ善根を積むよりも、人の作られた善根を喜ぶ。そのほうが徳は非常に大きいのだ。だから人の善根を喜べないのでしょうか。人間というのは、人が困れば困るほど喜んでおる。「ごまあみやがれ」というような調子です。善にしても、わしがせんと承知せん。わしが善をやつたということでないし承知せん。だから有漏善になる。善にも相場が入っている。そうではない。裸になれば、あらゆる人々の善根が我が善根だ。それが還相というものではないか。それが菩薩の還相回向というものではないかと思えますね。だからそこに釈迦牟尼仏のごとく書いてある。自らの小さな力で人を教化しようというんじゃない。あらゆる衆生が釈迦牟尼仏のごとく徳をたまわる。そこに布教の、伝道して救いたいという人間の要求が満足される。こういう意味でしょう。つまり、自分の目標は往相で、浄土だけれど、自分の背景が全部還相になるのでしょうか。還相が背景だ。往相は前景だ。往相と還相は背中と表だ。そういうような意味が出てくるんじゃないかと思うんですね。だからここには、人間というのとはわしだけが救われたらいいということとはなかなか言えないもので、皆が救われなければ自分も救われれないという。しかし皆が救われるというようなことはできない。やってみてもすえとらん。しか

し如来の本願に帰するなら、自分が救われるという、自利する。人は他利するんだ。自分で利他しようというように考えない。

還相回向のことを考えてみると、翼賛ということがあります。戦争中に翼賛会というものがあった、えらく反動的に言われたけど、その翼賛という言葉は、つまり仏教の言葉です。本願というものに、参加するという。参加という言葉、この頃外国の神学や哲学によく出てくるんだけど、参加する。参加という意味が、菩薩莊嚴という意味なんじゃないかと思うんですね。如来の本願力に参加する。参加するという形で伝道の要求が満足されるのではないか。自分としては一心というものを起こす。その一心によって自分が救われるのみならず、また如来の本願に助けられるというのではなくて、如来の本願に参加する。如来の本願というものを自分の境遇で活かすという。これはもつと言えば布教の、伝道の要求が満足されたことになる。つまりそこに、往相のときの自分は宿業の身ですけど、本願に立つてみるというと、宿業の身に新しい意味が出てくるのだろうと思うんです。本分という。宿業は分限、その分限というものを信心の眼によって開いてみると、そこに本分という意味が出てくる。自分の分を尽くす。自分の分を尽くして如来の大きな力に参加する。だから我々は小さいようだけれど、自分の与えられた境遇において、本願に参加するという大きな意義を持つてくる。それが浄土の菩薩というような意義を与えられる。人間の眼から言えば、宿業の身ですから自分のできることは知れたものだけれど、実は、意味は如来の本願に参加するという意味がそこに見いだされてくる。それによって人類を教化するというようなことが、意味として与えられる。そういうようなものに人間は加わらないと、人間の本当の要求が満足せん。自分だけ救われるんじゃない。誰でも救われなきゃ人間も救われん。こういうようなことが菩薩莊嚴というようなものを開いて出ておるんです。

（本稿は、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年十二月八日午後の講義の筆録を整理したものである。文責編集部）